

主 題：キリストは必ず来臨される⑤

聖書箇所：ペテロの手紙第二 3章15-18節

私たちはペテロの手紙第二3章を学んでいます。

A. 主の約束に対する忠実さ 14 a 節

特に14節のところから主イエス・キリストは再臨される、イエス・キリストは戻って来られるのだから、それにふさわしく生きて行きなさいとペテロは私たちに教えます。既に私たちが見て来たように、彼は再臨が近いのだから、そしていつ起こるかわからない出来事であるがゆえに、主の約束に対して忠実でありなさいとまず教えました。主が帰って来られるという約束を疑っている人はクリスチャンの中では皆無だと言えると思います。ところがその切迫性に関して鈍感になってしまっているクリスチャンがいることは事実でしょう。確かにイエス様は帰って来られるけれども、まだまだ先だ、まさかきょう帰っておみえになることはあり得ないと思ってしまうクリスチャンが多いというのが事実ではないでしょうか。

ペテロという人物は、イエス・キリストの再臨を確信し、その備えをしながら日々を歩んでいたことは言うまでもありません。Ⅱペテロ3：10に「主の日は、盗人のようにやって来ます。」と彼が言うように、いつ主が帰って来られるかわからない、そのためにその日に備えをしていなければならないと教え、そのように生きていたことは言うまでもありません。聖書を見ると、確かにこのイエス・キリストの再臨が差し迫った出来事であること、今にも起こりそうな出来事だということがさまざまな表現を用いて記されています。今日起こってもおかしくない出来事としていろいろなことばが使われています。

・「盗人」 Iテサロニケ5：2、黙示録3：3、16：15

その一つは今我々が見て来たように、「盗人」ということばです。今、Ⅱペテロ3：10をお読みしましたが、パウロもIテサロニケ5：2に「主の日が夜中の盗人のように来るとことは、あなたがた自身がよく承知しているから」と書いています。つまり「盗人」というのは誰も予期していない時に来るものだ。来るとわかっていたら、おめおめ盗みに入らせることはしません。だれも予期していない時に、まさかと思っている時に来るということを教えたいがゆえに、この「盗人」ということばを使っているのです。我々が学んだ黙示録3：3にも「もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。」とイエス・キリストが言われたことが記されていました。また同じ黙示録16：15にも「わたしは盗人のように来る。」と繰り返されています。ですから確かに「盗人のように来る」とか「盗人」ということばを使いながら、まさに私たちが予期せぬ時に主の再臨が起こるのだということを聖書が教えています。

・「思いがけない」 マタイ24：44、50（ルカ12：40、46）

また「思いがけない」という表現も使われています。イエス様もマタイ24：44で「あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」、また同じマタイ24：50でも「思いがけない日の思わぬ時間に帰って来」と言っておられます。確かに聖書はこういうふう私たちにイエス様の再臨に関してそれがいつ起こるかわからないし、きょう、今起こってもおかしくないということを教えます。

・「一瞬」 Iコリント15：51-52「

またイエス様の再臨とともに我々がイエス・キリストのもとに引き上げられることに関して、「一瞬」ということばも使われています。イエス様が迎えに来てくださったら我々は「一瞬」のうちにイエス・キリストのもとに引き上げられる。「一瞬」というのは瞬きの時間です。まぶたを閉じて開くその瞬間、我々は地上にいたかと思ったら次の瞬間にイエス・キリストのもとに、もし肉体的な死を経験していたとしたら同じような速度でもってキリストのもとに引き上げられると。あっという間に私たちはイエス・キリストにお会いするといったことが聖書に記されています。ペテロが教えるようにいつ主にお会いしてもよいようにきょう、この与えられたこの日にその備えをして生きることが必要だということをしかりと心にとめることが必要です。

B. 救いに対する忠実さ 14 b 節

二つ目に彼が私たちに教えてくれたのは、救いに対する忠実さでした。14節の後半に出てきました。「しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。」という命令が与えられていました。このことばはみずからの最善を尽くすということでした。おわかりのように、どんなに努力をしても我々は罪の赦し、救いを得ることはありません。私たちの努力はどんなに熱心でも、どんなに真剣でもどんなに献身的でも神の前に不完全だからです。救いは神が私たちに与えてくださるギフトであ

り、恵みである。だからここでは、罪の赦しをいただくために励めと言ったのではないのです。赦された者として「励みなさい」、ここで言っている救いというのは、罪からの救いではなくて、救われた者としてクリスチャン生活、聖化と言われているもの話です。クリスチャンとして「しみも傷もない者」とされたのだから、ますます神に喜ばれる者として、神の前を正しく生きて行くようにとペテロは教えてくれたのです。

C. 「使命に対する忠実さ」 15節

さて、三つ目に我々が見ていくのは15節です。ここでペテロは、使命に対する忠実さこそがイエス様がきょう帰って来られるかもしれないという信仰を持って生きている人の生き方にふさわしい歩みであると言います。15節「また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。」、この「考えなさい」は動詞で、これまでと同じように現在形の命令です。継続して考え続けなさいと命令されています。ペテロは、「私たちの主の忍耐は救いである」ということを継続して考え続けていきなさいと教えようとしているのです。この箇所を見た時に、既に私たちが学んだ9節を思い出します。「主は、ある人たちがおそいと思っただけで、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」、主はひとりでも多くの罪人が悔い改めることを忍耐を持って待っておられる。ひとりでも多くの罪人が主が備えてくださったすばらしい救いにあずかるようにと、神はそれを待っているのだ、あなたを待っていると。感謝なことです。それゆえに私たちもこの救いにあずかった。滅ぼされて当然なのに、さばかれて当然なのに神は私たちを忍耐を持って待ってくださり、救いへと招いてくださった。それが神のみこころならば、それが神の望んでおられることならば、それを知った私たちはその働きのために尽力すべきではないかと、ペテロは私たちに訴えるのです。神がそれを望んで、神がそのために忍耐を持って、ひとりでも多くの罪人が救いにあずかることを待っておられるのなら、先に救われた私たちもその働きに尽力すべきではないかと。確かにそのことは12節でも「その日の来るのを早めなければなりません。」と教えられていました。ペテロはこのすばらしい救いを伝えることだと、なぜならそれが神が望んでおられることだからという、同じことを繰り返しています。

主イエス・キリストがこの地上に来られたとき、そしてあの十字架から復活された後、マルコ16:15でイエス様は弟子たちにこんなことを言われました。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」、これが神が弟子たちに命じられたことです。そしてうれしいことに弟子たちはそれをすぐ実践しました。マルコ16:20には「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。」と書かれています。彼らは神が命じたことを喜んで、しかもすぐに行った。私たちはもう一度そのことを思い出さなければいけない。私たちは神によって神と和解させていただいた者です。今言ったことをよく噛みしめてください。私たちが神と和解したのではない、神が私たちと和解してくださった。なぜならば我々は生まれながらに神に逆らって来たからです。私たちが造ってくださり、私たちを愛してくださり、私たちを生かしてくださった。私たちはその神を全く無視して、神でないものを神として信じ仕えていた。生まれながらに神のさばきを受けてしかるべき存在である私たちを神は見捨てることなく、私たちの罪を赦し、私たちと和解しようと、イエス・キリストをこの地上に遣わすという方法で救いの手を差し伸べてくださった。

1. 「神は和解を可能にしてください」 ローマ5:11

パウロはローマ5:11に「私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、」と書いています。つまり神様と私たちとの関係を修復するために、神に逆らった私たちと神とが和解するために、神はイエス・キリストを私たちのために、和解のために備えてくださった。このイエス・キリストによって我々罪人は神と和解することが可能になったのです。

2. 「神は和解を与えてくださった」 ローマ5:10

しかも、神は私たちに和解を与えてくださったと同じローマ5:10が言っています。「敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」と。神はただ私たちと和解するためにイエス・キリストを送ってくださったわけではない。この箇所が教えるように、イエス・キリストをあなたに代わって罰することによって、あなたと和解しようとしてくださった。我々があのイエス・キリストの十字架を見る時に覚えることは、イエス・キリストが十字架で死を経験されたのは、あなたの身代わりであり、イエスはあなたの罪を負ってあなたの変わりにあなたが受けるべきさばきを受けてくださったということです。ここまでして神はあなたを愛してくださり、あなたを赦そうとしてくださった。我々は神の敵として、それにふさわしく歩んできたのです。神に逆らうことばかりを繰り返して来ました。でも神はあなたの罪を赦すためにひとり子を送ってくださり、あなたではなくて、あなたの代わりにイエスを罰して、あなたに救いを与えようとしてくださった。パウロが教えるように、このイエス・キリストの身代わりの死、あの

十字架によって、イエスを信じるすべての人に神との和解が可能となったのです。

3. 「神は和解の務めを与えてくださった」 IIコリント5：18、20

こうして和解を備えただけではなく、私たちに和解を与えてくださいました。イエスの死によって神との和解が成立しました。そしてそれですべてが終わりではないのです。今度は和解した私たちに和解を伝える務めを与えてくださったということです。IIコリント5：18に「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。」と記されています。「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ」、今見て来たように、イエス・キリストの十字架の死によってあなたの罪をその身に負ってイエス様が十字架で死んでくださることによって、神はあなたを救おうとなされた。神ご自身と和解して、あなたのすべての罪を赦そうとしてくださいました。そしてそれで終わったのではなく、神様は赦されたあなたに大切な和解の務めを与えてくださった。今度はあなたが出て行って、こんな和解が可能なのだということを伝える役割を神様があなたや私に下さったと言うのです。ですから同じIIコリント5：20に「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。」、私たちはキリストから直接遣わされた者で、大使のような存在です。我々を遣わしてくださいましたのは、まことの神であり、すべての支配者であられる方、主の主であられる方、この方が私たちを、あなたを遣わしてくださいました。「ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」と。我々はそれを思い出さなければいけない。それこそが神が望んでおられることであり、神は大きな犠牲をもってあなたや私に救いを下さった。でもそれですべてが終わったのではない。今度はこの救いにあずかったあなたが、そして私がこのすばらしい救い主を、この救いを伝える者として和解の使者として出て行くという務めを神が与えてくださったのです。

よく考えてみななければいけないのは、この働きに対して、この使命に対して我々は忠実であるかどうかです。その働きを忠実になしているかどうかです。どこかで自分はそんなことはできないと、最初から諦めてしまいませんか？神がこのような務めを下さった以上、神の助けによってこれは可能です。一番問題なのは、神の助けではないのです。我々がそれをしたいかどうか、それをして行こうとするかどうかです。先ほどから見て来たように、確かに神は私たちにこのすばらしい神の福音を宣べ伝えなさいと言われていています。我々は神の和解を経験した者として、神の和解をいただいた者としてそれを伝えなさいということが教えられています。でも実際この15節を見た時に、そのように書かれていません。

「私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。」と書いてあります。もしここでだからあなたたちは行って語りなさいと言ったとしたら、ある人たちは語るかもしれない。でも恐らくペテロが言いたかったことは、問題なのはその行為ではなくてその心だということです。もし私たちが神に感謝しているならばそれは形として現れていくでしょう。神によって和解していただいたこと、救われたことを感謝していたら、それは何らかの形となって出て行くでしょう。あなたがこの救いにあずかった時に、あなたは神が私たちの罪を赦してくださるということを誰かに語りたかった、黙っていることができなかつたはず。問題はそれを忘れていないかどうかです。そこでペテロは「考え続けていきなさい」と言うのです。しなければいけないからするのではなくて、したいからするのです。その心こそが神の前に喜ばれることです。私たちがどんなことをしてきたのか、それを誇りたいかもしれません。しかし、神の前では全くそういうことは誇る対象ではありません。神の前で神がごらんになることは、我々がどんな心を持って日々を生きただけです。ペテロがここで教えることは、神様があなたになしてくださいましたみわざ、そのすばらしい救いのみわざを今度は伝える務めを私はあなたに与えますと。

実際に、多くの人々がその働きを実践してきました。何人かを皆さんに紹介したいと思いますが、皆さんよくご存じの人ばかりです。詳しい説明は全く必要としない。

・悪霊を追い出された男：ルカ8：26～

一人目はレギオン、何を意味しているかということ、「大変数が多い」という意味です。悪霊に憑かれていたひとりの人物です。名前も出てきません。ガリラヤ湖の東に住んでいた。ゲラサ人の地方にいた一人の人物です。悪霊に憑かれていて普通の家には住むことができませんでした。墓場で生活をしていたと聖書は言っています。この人物がイエス・キリストによってその悪霊を追い出していただき、癒されるのです。そこでこの人物はイエスに何を望んだかということ、イエス様に「お供をしたいときりに願った」と書いてあります。ところがイエス様はそれを承諾しないで、こんなことを彼に言われました。「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださいましたかを、話して聞かせなさい。」、これがイエス様がこの人物に命じたことでした。そうすると彼は「そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださいましたかを、町中に言い広めた。」と書いてあります。ルカ8：26の所からです。特別な教育もなかったかもしれない。神学的な教育を受けていたわけでもないでしょう。しかし、神がこんな大きなことを私のためにしてくださいました。それを経験した彼は少なくともそれを伝える人、神のみわざの証し人になったのです。そして彼を通して町中の人々がこの神のみわざを知ったのです。

・使徒たち：使徒4：20

あの使徒たち、イエス・キリストの弟子として歩いて来た人たちはどうでしょう。イエス様とともにいたから神学的なことをよく知っていて、彼らが口を開くと難しい神学がいつも語られていたのかというと、そうでないことを彼ら自身が言っています。使徒4：20で「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」とあります。あの使徒たちでさえも自分たちが経験したことを人々に話すのだ、自分の見聞きしたことの証人だ、そのように語っています。レギオンに憑かれていた人物や使徒たちも神が自分に何をしてくださったのか、自分に与えられた救いの恵みを人々に宣べ伝えたのです。

・サマリヤの女：ヨハネ4：25～

サマリヤの女はどうでしたか？ヨハネ4章の中に出てきます。彼女も同様に町の人々を救いへと導くきっかけを作るのです。彼女はイエス様にこんなことを言っています。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。」、この女性がイエス様にそう言った時に、イエス様は「あなたと話しているこのわたしがそれです。」と言われた。驚いたでしょう。彼女は皆さんもよくご存じのように、ほかの女性たちが絶対に水を汲みに来ない時間に井戸に来ていたのです。社会の中であって、彼女はその中に入る事が許されなかった。罪があったからです。だからみんなが来ない時間、みんなと顔を合わせなくてすむ時間帯に水を汲みに来ていたのです。ところがこの女性は、この話をイエス様から聞いた時に自分の水がめを置いて町へ行き、人々に「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」と、その話をしたのです。そうすると、聞いた町中の者たちが井戸の所に集まって来て、イエス様に「二日間、ここに滞在してください」と言うのです。。そして最後に彼らはこう言っています。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」と。町の人々はこの女の話聞いて、井戸の所にやって来て、そしてイエス・キリストを見て、イエス・キリストとともに二日間過ごして、そして確かにこの方が約束の救世主だ、救い主だということを確認して信じたのです。でもこのすべてのきっかけを作ったのは、この女性でした。

・ヨハネのバプテスマの弟子アンデレ：ヨハネ1：40-42

もうひとり、バプテスマのヨハネには弟子がいました。ヨハネのバプテスマがイエスを見た時に、この弟子たちに彼について行きなさいと言います。その中のひとはヨハネです。ですからヨハネの福音書にだけこの出来事が記されています。なぜならヨハネは自分でこのことを経験しているからです。もうひとりのバプテスマのヨハネの弟子はアンデレです。アンデレが何をしたかということ、ヨハネ1：41-42に「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、『私たちはメシヤ（訳して言えば、キリスト）に会った。』と言った。彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。」、つまりアンデレは、自分がメシヤ——救世主に会ったことを自分の愛する兄弟に伝えています。しかもペテロ——その当時はシモンと呼ばれていましたが——をイエスのもとに連れて来た。そして、アンデレもシモンもイエスの弟子としてその後神に従う者となりました。

つまり、聖書的な教育がなくても、知識がなくても、語るメッセージはあるということです。イエス・キリストが自分に、あなたに何をしてくださったのか、そのことは語るができます。なぜならそれは神があなた自身になしてくださったみわざだからです。難しい話をしなさいとは言っていない。難しい話を使徒たちもしなかつた。彼らは自分たちが経験したことを話したのです。あのサマリヤの女もそうでした。ペテロの兄弟アンデレも、彼らは人々にイエス・キリストを紹介するのです。主が忍耐を持ってひとりでも多くの罪人が悔い改めに進むことを待っておられる。そのことを知ったなら、その働きを助けようとする。それは自然なことだと思いませんか？主がそのことを望んでおられることを知ったら、それを何とか手伝いたいと思うのが自然なことではありませんか？あなたが救いにあずかったのも、このすばらしい救いを、救い主を宣べ伝えるためです。神が私たちに下さったすべてのもの、時間、力、富、賜物、すべてのことを我々はこの救いのためになすことです。なぜならそれを神は喜ばれるからです。我々はとても大切な使命を神様からいただいた。それに対して忠実であること、イエス様が帰って来られることを本当にきょうかもしれないと思っている人たちは、そのように生きるとペテロは教えてくれます。

D. 「みことばに対する忠実さ」 15b、16節

四つ目、みことばに対する忠実さです。イエス様が帰って来ることがきょうかもしれないと思っている人は神のことばに忠実に従っていこうとするという話です。

1. 教えの真実さ 15b、16節

15節の後半から見ると、「それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っていま

す。」、ペテロは彼自身のメッセージが真実だということを証明していこうとします。彼の記したメッセージが真実であることを証明するために二つの根拠を挙げています。今からそれを見ていくのですが、その前に少し見ていただきたいのは、この15節のところに「私たちの愛する兄弟パウロも、……あなたがたに書き送ったとおりです。その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが」とあります。少しややこしいので整理するという、「ほかのすべての手紙でも」と書いてありますが、ある手紙が送られてほかの手紙でもと言っているのです。ということは、この読者たちはパウロから送られた手紙を少なくとも一つは手にしているということです。そして彼らはそれ以外の手紙も自分たちのところに届いたことを知っているのです。小アジア地方、現在のトルコには幾つかの教会が点在していました。その教会に宛ててペテロはこの手紙を記しています。パウロも同じようにこの地域の教会に宛てて手紙を送っているのです。どんな手紙かというと、一つはコロサイ人への手紙です。もう一つはガラテヤ人への手紙です。またエペソ人への手紙も送られています。こういう手紙は、自分たちが読み終わったら次の教会に送って、その地域において回覧したのです。そうやっていろいろな手紙が届いたのです。その中の一つを彼らが持っているとして、ペテロはこのように記していることができます。

1) パウロの教えとの整合性

そしてペテロが言いたいのは、先ほど見たように、「このことについて語っています」という、この16節の最初のところです。ここでペテロが言いたかったのは、パウロが送ったいろいろな手紙があなたたちのところに来たと思うけれども、その手紙の中に私が語ったと同じことがパウロによって語られているということです。では、ここで言われている「このこと」とは何かということ、それはペテロが語って来たことです。神の日の到来についてです。主の日の到来についてペテロ自身が語ってきました。ペテロが言いたいことは、私が語ったことは実はパウロも語っていたし、そしてあなたたちはもう幾つかの手紙を読んだはずだし、その中に記されていたでしょう？と言っているわけです。ペテロは、自分の教えの真実さを、パウロが記した書簡を引き合いに出して証明するのです。私が教えていることは私が勝手に教えているのではなくて、パウロも同じことを教えていたでしょう？あなたたちはそれを読んだでしょう？と言っているのです。確かにテサロニケ第一、第二の手紙の中でも、またコリント第一、第二の手紙の中でも、またローマ人への手紙の中でも、そのようなことが記されています。確かにパウロはペテロが教えたように、主の再臨について教えています。それを引き合いに出したのです。

2) 神から与えられたことば

二つ目に彼は、実は私が語っていることはパウロが語ったと同じように、神から与えられたことば、神のメッセージを語ったのだと言うわけです。15節に戻って「それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。」とあります。どの手紙を指しているのかは明確に記されていません。しかし、ペテロが言いたかったのは、どの手紙ということではなくて、それらの手紙はすべて「与えられた知恵に従って」記されたものだということです。「与えられた」ということばは受け身です。ということはパウロ自身が勝手に自分の知恵を用いて書いたというのではなくて、パウロが記したメッセージは別から与えられたものであると言っているのです。ではこの知恵が一体どこから来ているのかという、言うまでもなく神からです。パウロ自身もほかのところで「神の御霊を受け」て、そしてその「御霊に教えられたことばを用い」ていると、Iコリント2：12-13に記しています。またパウロはテサロニケの教会の人たちがパウロたちのメッセージを聞いた時に、「私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。」（Iテサロニケ2：13）と記しています。パウロたちがメッセージをした時に、テサロニケの教会の人たちは、これはパウロのことばではなくて、神のことばであるとして受け入れた。そのことをパウロは感謝しています。またエペソ3：3でも「この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。」と言っています。「啓示」というのは、神が人間に明らかにしようとしたゆえに人間に明らかにされたことです。神がそのように望まなければ人間は決して知ることがなかった。ですからパウロは、私が語ったこと、私が知っていることは自分が考え出したことではなくて神から与えられたもの、神からの「啓示」であったと教えています。

そこでペテロは言うのです。私もパウロと同じことを教えているでしょう？そしてパウロがこうして神からのことばを語ったように私も神からのことばを語っていると。ペテロはこの二つの理由をもってペテロが記したことが真実なのだということを記すのです。パウロも同じことを教えているし、そしてパウロと同じようにこのメッセージは勝手に編み出したメッセージではなく、神から与えられたものである。今私たちはそのすべてをこうして読むことができるわけです。私たちが確信することは、確かにこれは神から来たものだということです。なぜなら2000年たってもまだすたれていません。2000年たってもこの聖書のことばは私たちを根底から生まれ変わらせます。そして同じ箇所から同じことを聞いていても、神は聞くひとりひとりの心に不思議に働いてくださる。神のことばは生きているか

らです。ペテロはこうして彼のメッセージが神様からの真理であることを明らかにするのです。

◎ 信仰者ペテロ

問題はその神のことばに対して、忠実なのかどうかということです。そのことに進んでいく前に一つだけこのペテロという人物がどんな人物だったのか、どんな信仰者だったのかを知ることができるみことばが記されているので、少し見てください。15節に「それは、私たちの愛する兄弟パウロも」と、ペテロはパウロのことをこんなふうに言っています。私の、また「私たちの愛する兄弟」だと。ガラテヤ2章で、ペテロはパウロによって大変厳しい非難を受けたことを思い出してください。割礼派の人々がやって来たら、ペテロたちは彼らのことを恐れてしまって、自分たちが教えていることと違う行動をとってしまった。そのことをパウロは、ペテロ、間違っていると、ペテロの面前で厳しく注意します。普通人間だったら、人々の前でそういうことを指摘されたり、批判されたりすると、そういうものが残ってしまったりするものです。あの人嫌だなとか、あの人苦手だなとか、あの人はあるひどいことを言ったのだからあんまり好きじゃないとか。彼の中には全くそういうものが見えません。パウロのことを「私たちの愛する兄弟」と呼んでいます。恐らくペテロは自分のそういった間違いを愛を持って正してくれたこのパウロに対して、大変深い感謝を持っていたのでしょう。我々もそういう関係でありたいですね。なぜならみんな成長したいのです。みんな変わっていききたいのです。そのためにはいろいろな弱いところを愛を持って指摘し合う、そういうことができたなら間違いなく神の栄光が現されていく。ペテロという人物は、我々が考えるような人間的な弱さを持っていない。人に対してそういう悪い思いなど抱いていない。そういう人物だということをこのことばに我々は見ることができます。大変な信仰者であったと。

2. 教えを曲解する者たち 16b節

1) 難解な教え

さて、最後に見て行きたいのは、なぜみことばに対して忠実さが必要かということ、実はみことばを曲解する者たちが出てくるからです。そのことが16節の後半に書かれています。「その手紙の中には理解しにくいところもあります。」、非常にユーモラスなことがペテロによって記されています。パウロが書いた手紙の中に理解しがたいところ、つまり理解するのが難しいところがあると。何かこれを聞くとほっとしません？ペテロでさえも難しいと言うのです。我々もパウロ書簡を読んでいて非常に難しいと思うのですが、ペテロ自身もそう告白しています。でもだからと言って難しいから、わからないからどうでもいいやではなくて、聖書が我々に教えるのは、聖霊なる神様が与えられたのはその聖霊なる神によって神の真理を我々が理解することができるからです。必要なのはもう少し熱心に、もう少し時間をかけてみことばを学ぶことです。

2) 曲解する教え

さて、そのことを記した後で、「無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所のばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」と続きます。「それらの手紙を曲解し」ている、この「曲解する」というのは曲げることですけれども、真理から逸脱するという意味があります。しかもこの「曲解する」という動詞は現在形で書かれています。そのような歩みを継続していたのでしょう。つまり神のみことばを見ても、難しいからと言って自分勝手な解釈をして真理から逸脱している、そういうことを継続していた。神はそういった罪に対して大変厳しいメッセージを記しています。自分自身に滅びを招いていると。神のさばきがあるということです。どんな人々が真理を曲解するのかというと、「無知な、心の定まらない人たち」と書いてあります。この「無知な」人というのは新約聖書のここにしか出てきません。どんな人たちかということ、一つは情報に欠けているという意味があります。また信仰の初心者であって、難しい教理や教えがまだよく理解できない、そういう意味があります。また「心の定まらない人」、これは2:14にも出てきました。ふらふらしている人の話です。しっかりとその心が土台に打ちつけられていない、真理にしっかりと立っていない人の話です。いろいろなことを学んでいるかもしれないけれども、よく理解していない、だからいろいろな教えに惑わされてしまうということです。願わくば皆さんはそういう人でないことを期待します。神がこう言われている、聖書がこう教えているのだ、その確信を持って生きる信仰者、そういう信仰者であるはずです。こういうふうに分らふらしているとうどうなるかということ、偽りの教師たちはこういう人々を誘惑するのです。もう一度Ⅱペテロ2:14を見ると、にせ教師たちの話です。「その目は淫行に満ちており、罪に関しては飽くことを知らず、心の定まらない者たちを誘惑し、その心は欲に目がありません。」、こういう偽りの教師たちがこのような「心の定まらない人たち」を誘惑するのです。しっかりと聖書に立っていないと、いろいろなことによって惑わされるという話です。

ペテロが教えたいことは、私たちが手にしているこの聖書というのは神のおことばであって、我々はこの権威ある神のことばに従うことが必要だということです。人間ではないのです。神のおことばに従

うことが必要なのです。そのことを教えるわけです。これは神ご自身が下さったメッセージだと。そのことは皆さんもおわかりだと思います。先ほども見てきたように、このことばによって私たちは救いを得るのです。このことばによって私たちは日々この地上において、物においては絶対得ることのできない豊かな人生を生きることができるのです。この聖書によって私たちは本当の幸せを持って生きることができるのです。それは人間の約束ではない、神ご自身が約束して下さったことです。だから私たちはこの神のことばの権威に服することです。これに従うことです。2000年前に、惑わす者たちがいたのです。そして多くの人たちがその惑わしに惑わされていたのです。悲しいことに彼らはこの真理を曲解してしまった。真理から逸脱してしまった、そういうことがあってはならないと、ペテロは言うわけです。

このメッセージは今も生きています。今の私たちの生きているこの世の中を見た時に、悲しいことに世の中自体が神に背を向けているだけではない、実はクリスチャンの中でもそういった動きが出ているのです。今、世の中はジェンダーレスと言われている。つまり性別を全く明らかにしないというのがあります。本当ならば、男の子に生まれるなら男の子にチェックするし、女の子だったら女の子にチェックする。でも、カナダでひとりの赤ちゃんが生まれて、その子はどちらにもチェックされていない。なぜかという、親がこの子が成長した時に自分の性別を選ぶことができるというのです。今年の話です。もうそういったことが世界で起こり始めている。実は聖書の中でも神を表す時に“H e”、男性代名詞が使われています。ところがそういうものを全部除こうという動きがあって、聖書の中にもそういう訳を始めようとする動きがあります。私たちはこれが神のおことばであるから、神が言われたとおりに私たちは受け取らなければいけない。でも世の中はどんどん神から離れて行きます。しかもその影響を受ける危険性がある。もうそれを受けているのです。知らず知らずのうちにそういった悪の働きというのが教会の中にもある。クリスチャンたちの中にも入って来る。だから気をつけなければいけない。皆さんの手にしておられるその聖書は、神ご自身があなたに下さったものです。人々は何千年にわたってこの聖書のことばを支えに生きて来ました。神のことばだからです。10月の最後に私たちが学んだようにどうして宗教改革が起こったのか——。神のことばに立ち返ろうと。まさにこの聖書のみが神のことばだからです。その信仰を捨ててはいけません。この神のことばに忠実でありなさい。それがペテロが私たちに教えるメッセージでもあります。世の終わりが近づいている。イエス様の再臨が近い。だからこそ我々はますますこの神のことばにしっかりと立って、これに従いながら日々を過ごしていくこと、それが主のメッセージです。どうかそのように生きて行きましょう。このみことばを高く掲げて、これが神のメッセージなのだとそのことを我々がただ信じるだけではなく、それを語るメッセンジャーとしてしっかり生きて行きましょう。